

いずれにせよ、それら二つの双極が同じ局面、同じまな板の上に
乗らなければ四極とは言えないだろう。これらの事例だけでは四極
論には結実しえない。ただし、複数の双極要因があるらしいことは
明らかとなったわけであり、少しずつほぐれていく可能性はあろう
か。

また、双極の融合は伝統演劇の各ジャンルで実現していることが、
キーン稿の指摘で明らかとなった。そこにこそ、日本文化の価値が
あるというのが私の主張だが、それを四極の融合（止揚）へ発展さ
せるには後考を要する。

七、むすび

横軸に取った中世・近世は、つまり時間軸であり、縦軸にとった
縄文・弥生は、それを関東・関西に置き換えれば空間軸ととらえる
ことができる。時間軸と空間軸の交わりと考えるなら、四極性の理
論的構築は可能ということになる。

もちろん、どの国にも地域差はあるが、日本の関東と関西ほ
ど極端な差で現出することは珍しいであろう。しかも、東京と大阪
はわずか四百キロほどの短い距離、狭い日本の文化現象である。狭
いにもかかわらず、というところが要点である。

また、中世・近世という隣り合わせた時代の好み・価値観の差異
が極端だということも、海外ではあまり例がないのではあるまいか。
まして、両者が時代を超えて後世に伝承され、共存しているという
のは希有なことであろう。極めて日本的な現象と言える。

そうであるからこそ、私の指摘する「四極性」は日本の文化現象
の特徴と言えるのである。

注1 一九六二年に岩波文庫（山口光朝訳）として刊行された。上・中・下
の三冊。各冊四百頁余り計千二百頁を越す大冊である。本稿の引用はこれ
による。

注2 原文はドイツ語。著者がイスタンブールで没した半年後の一九三九
年、論文「日本建築の基礎」など二篇と日記の抄録二篇を篠田英雄の訳で
収録し、岩波新書「日本美の再発見」として刊行した。その後版を重ねて
一九六二年に「日本建築の世界的奇蹟」「伊勢神宮」を加え、同新書の〔増
補改訳版〕として出版された。本稿の引用は〔増補改訳版〕による。

注3 日本語訳に、長谷川松治訳の現代教養文庫版（二〇〇五）、角田安正訳
一九六七）と、同じ長谷川訳の講談社学術文庫版（二〇〇八）、角田安正訳
の光文社古典新訳文庫版（二〇〇八）などがある。本稿の引用は現代教養
文庫版による。

注4 金関寿夫の日本語訳で一九九〇年に中央公論社から刊行された。本稿
の引用はこれによる。

注5 「狂言の普遍的価値——二つのアウフヘーベン——」（『民俗と風俗』
第十八号、二〇〇八）で論じ、「人間国宝 野村万作の世界」（明治書院、
二〇一〇）でも説いた。

つなのである。

私自身は、むしろ狂言においてこそ、様式と写実の融合（私はあえて「アウフヘーベン＝止揚」と表現している）が見られると主張し、それが狂言の普遍的価値であると説いている。^(注) 狂言においてこそ、より顕著な融合が見られると思うが、それが能にも見られるというのは、そのとおりであろう。

引用文中の「激しさと静けさの結合」という表現は、前述したベネディクトの言う「荒魂」と「和魂」にも関連するように思われて気になるが、即断するには躊躇を覚える。今後の課題としておきたい。また、歌舞伎においては、女形の演技に関して写実と非写実の融合が説かれている。

舞台から女を追放した結果生れたいわゆる女形^{おんながた}は、他の何物にも増して、歌舞伎における、写実と非写実との、あの特徴的な調和に貢献したのである。

男が女をそれらしく表現する演技は、もちろん写実でなければならぬが、それを型として伝承してきたのが女形である。型はすなわち様式である。

能は様式に極端に傾斜した中に写実が見られ、歌舞伎はかなりのレベルで写実的でありながら様式化した演技の伝承が行なわれていると整理できよう。狂言の場合は、私見によれば、様式と写実の相半ばするレベルであり、両者が調和した典型事例と見ておきたい。いずれにせよ、日本の伝統演劇の各ジャンルには両者の融合が見られるという指摘は注目に値する。

六、双極性（二元性・二重構造・二面性）から四極性へ

以上、外国人によって指摘された日本文化、日本社会における双極性（二元性・二重構造・二面性）について、管見に入ったものをひととおり確認してみた。これらによって、日本の社会と文化には双極性が随所に見られることが、ほぼ明らかになったかと思う。そしてそれが欧米の文化状況との差異の一つであることも明確になったであろう。

さて、では、その双極性が果たして四極性になりうるかという問題である。

従来の私の主張は、中世と近世の双極を横軸にして、縄文と弥生の双極を縦軸として交わらせ、四極と考えてきた。横軸と縦軸の交わりは正しいかという問題はまだ十分に解決していないが、いちおうそれに合わせて考えてみたい。

タウトが指摘した日光東照宮と桂離宮の両極は、中世と近世の双極事例として既述した。その判断は、本稿においても変わらない。

ベネディクトが指摘した「和魂」と「荒魂」は、前者が弥生的で後者が縄文的と言えるかもしれない。私の理解では、弥生文化は、その土器の意匠に見られるように柔和な精神であり、縄文文化は、やはり土器の形にうかがえるようにダイナミックな精神と認められるからである。そして、弥生的な好みは関西に伝えられ、縄文的な好みは関東に伝存しているというのが、私の見解である。

オールコックの言う二元性・二重構造の原因は、中世・近世に由来するものか、あるいは縄文・弥生に由来するものか、どちらとも関係ないか、にわかに判定できまい。よく吟味したい。

でに勇敢である。彼らは階層制度にもとづいて服従が要求されるような事態においては、いちじるしく従順な態度を示すが、それでいて、なかなか上からの統制には従わない。彼らは非常に慇懃であるが、それにもかかわらず、依然として傲慢不遜な態度を留めている。彼らは軍隊で狂信的な訓練に服するが、それでいて不従順である。彼らは熱烈な保守主義者であるが、それでいて、中国の慣習や西欧の学問の採用において相次いで示してきたように、目新しい生活様式に心をひかれる。

ベネディクトは一度の来日経験もなしに、アメリカにある資料とアメリカに在住している日本人によつて、調査分析を進めた。それにしては詳細にして鋭い分析だとも言えるし、やはり一部誤解もあるのではないかという見方も可能であろう。

ベネディクトが分析したのは戦前の日本である。戦後、様変わりした日本の状況には当てはまらない部分もある。ここに指摘されている子育ても一変した。現在の日本については、改めて考察する必要があるであろう。

そういう問題を考慮したうえで、本稿の目的に即して理解するなら、少なくとも西欧人の目に映ったかつての日本人男子が、極端な二面性を示すように見えた事実は重要である。その原因が幼児体験にあったのかどうか、にわかに判定できないが、原因が何であれ、西欧人に比べて二面的な行動パターンを見せた日本人の傾向は無視できない。その事実のみを、ここでは押さえておきたい。

五、ドナルド・キーン『日本人の美意識』の所説

『日本人の美意識』^(註)は、最近日本国籍を取得したアメリカの日本文学研究者ドナルド・キーン^(註)の著書である。「日本人の美意識」「平安時代の女性的感性」「日本文学における個性と型」「日本演劇における写実性と非現実性」「日清戦争と日本文化」「一休頂相」「花子」「アーサー・ウェイラー」などの章からなる。

その中の「日本演劇における写実性と非現実性」において、日本の伝統演劇には対立物の調和があることを指摘したくだりがある。

能はたしかに写実的な演劇ではなかった。洋の東西を問わず、他のどんな演劇と比べてみても、能は並外れて様式化され、詩的な性格をもつ演劇だからだ。とはいえ私は、後世に現われたあらゆるタイプの日本の演劇同様、写実主義と様式性とが、能の中に同居していた事実を強調したのである。世阿弥は、二つのタイプの能——象徴的なものと写実的なもの——を両方も作った。だがその理由は、年と共に彼の見解が変って来たからというのではなく、観衆の要求に変化があったからというのではなく、ひとえに彼にとつては、己の芸術の両面が、共に肝要なものだと思われたからだ。『風姿花伝』や『花鏡』の中で、世阿弥は、鬼の舞を舞う時の心得として、役者の足が、写実的な動作で、舞台の床を激しく踏みつけている間も、彼の上半身は、静止していなければならない、という趣旨のことを書いている。写実主義と様式化の結合と同様に、この激しさと静けさの結合は、以後現われる歌舞伎と浄瑠璃にも、常に見られた特徴の一

また、日本人の人情観を説いたくだり、「肉体と精神という二つの力が、各人の生活において覇権を獲得するために、たえず闘っている」と考える西欧の哲学を根底からくつがえす」と述べて、次のように説く。

日本人の哲学では、肉は悪ではない。可能な肉の快楽を楽しむことは罪ではない。精神と肉体とは宇宙の対立する二大勢力ではない。そして日本人はこの信条を論理的に押し進めて、世界は善と悪との戦場ではないという結論にまで持ってゆく。(中略) 事実日本人は、悪の問題を人生観として承認することを終始こばみ続けてきた。彼らは人間には二通りの魂があると信じているが、それは互いに争い合う善の衝動と悪の衝動とはない。それは「柔和な」魂〔和魂〕と「荒々しい」魂〔荒魂〕とであって、すべての人間の——またすべての国民の——生涯には、「柔和」であるべき場合と、「荒々しく」あるべき場合とがある。一方の魂が地獄に、他方が天国に行くことと定まっているのではない。この二つの魂はともに、それぞれ異なった場合に必要であり、善となる。

「和魂」(和御魂)も「荒魂」(荒御魂)も死語となった現在では、ベネディクトのこの説を一読で理解することは難しいが、要するに、日本人は状況に応じて二面的なものを使い分けると言いたいのであろう。

たとえば、結婚式の披露宴において、媒酌人や主賓の祝辞などの儀式的段階では、全員人形のように静止した緊張状態にあるが、乾杯が終って余興の段階になると、まるでタガが外れたかのような下

ンチャン騒ぎになることはしばしば見られる。ネガとポジのように静と動が極端に変化する傾向は、日本人において特徴的に見られる現象かもしれない。

日本人の二面性は、前掲の引用部分で具体的に指摘されていたが、その理由を、ベネディクトはこのように解き明かしたのである。

また、政府が主導して民間に払い下げた大企業・大資本が存在する一方、最小限度の資本投下と最大限度の低賃金労働の利用によって運営される小企業・小資本が存在する実態も二元性の現われとして言及している。そのうえで、「この日本の産業の二元性は、日本人の生活様式において、政治や宗教の分野における二元性と同じように重要である」と説く。

そして、その二元性の原因は、幼児体験に基づくというユニークな説を展開している。

西欧人の目を驚かす日本人男子の行動の矛盾は、彼らの子供時代の訓育の不連続性から生じるのであって、「上塗り」をされたのちもなお、彼らの意識の中に、彼らが自分の小さな世界における小さな神様であった時代、思う存分に駄々をこねることとさえてきた時代、どんな願いでも叶えられるように思われた時代の深い痕跡が残る。このように深く心の中に二元性が植えつけられているために、彼らは大人になってから、ロマンティックな恋愛にうつつを抜かすかと思うと、急に掌を反すように家族の意見に無条件に服従する。快楽に耽り、安逸を貪るかと思うと、極端な義務を果たすためにどんなことでも進んで行なう。慎重の必要を説くしつけが彼らを行動においてしばしば臆病な国民にしているが、しかしまた彼らは時には猪突的と見えるま

存在であると、贅辞を惜しまない。

まことに桂離宮は、およそ文化を有する世界に冠絶した唯一の奇蹟である。パルテノンにおけるよりも、ゴシックの大聖堂あるいは伊勢神宮におけるよりも、ここにははるかに著しく「永遠の美」が開顕せられている。

思想的価値観が背景にあると思われるブルーノ・タウトの評価は、いかにも極端である。価値の当否はひとまずおくとしても、両者の形象理念における対照的な相違は、この言辞によって明らかである。

この相違を、私は中世と近世の双極性の事例と解釈した。建築時期はどちらも近世の江戸初期であるが、背景となっている文化が、桂離宮の場合は中世の公家文化だからである。

四、ルーズ・ベネディクト『菊と刀』の所説

アメリカの文化人類学者ルーズ・ベネディクトが著した『菊と刀』^(注)は、第二次世界大戦下において、アメリカの戦時情報局の求めに応じて報告された日本研究の成果である。公刊されたのは、終戦後の一九四六年（昭和二十一年）だった。

文化人類学の方法論を適用して、「恩」や「義理」などに着目し、日本文化の特異性と価値を分析している。日本の文化は他人の批評を意識する「恥の文化」であり、欧米の文化は内面的な良心を意識する「罪の文化」であると説いたことで知られる。すぐれた日本文化論として注目され、戦後の日本に大きな影響を与えた。

ルーズ・ベネディクトは第二次世界大戦において戦争関連の研究や助言のためにアメリカ政府が招集した学者の一人。日本を訪れたことはなかったが、日本に関する文献の分析と日系移民からの聞き取り調査によって、日本文化の解明を試みた。未開宗教、神話、伝説の研究を得意とし、「文化型」の提唱者として知られる。

その著『菊と刀』に、日本人の二面性を指摘したくだりがある。

日本人は最高度に、喧嘩好きであると共におとなしく、軍国主義的であると共に耽美的であり、不遜であると共に礼儀正しく、頑固であると共に順応性に富み、従順であると共にうるさくこづき回されることを憤り、忠実であると共に不忠実であり、勇敢であると共に臆病であり、保守的であると共に新しいものを喜んで迎え入れる。彼らは自分の行動を他人がどう思うだろうか、ということをおそろしく気にかけると同時に、他人に自分の不行跡が知られない時には罪の誘惑に負かされる。彼らの兵士は徹底的に訓練されるが、しかしまた反抗的である。

もちろん、日本人の中には様々な性格の人がおり、両極端な行動を示す場合がある。しかし、ベネディクトが言いたいのは、一人の人間において表裏一体のような二面性を持っているということらしい。また、日本人全体の傾向として、両極端な反応を示すことがあるとの指摘であろう。

いくら何でもそこまで極端ではなからうと言いたくなるけれども、ざりとて思い当たるふしがないでもない。少なくとも、この指摘を頭から否定することはむずかしい。多くの日本人はむしろ、痛いところをつかれたという気持ちになるのではあるまいか。

の体制は崩壊したが、天皇と首相の並存という意味では形態として残っているし、「各人がお互いに見張り役であり、見張り合っている」という気質は、現在でも失せていないように思える。

たとえば、海外在住の日本人が、日本人の違法行為を日本大使館に通告することがしばしばあるそうだと。そして、それが日本人にありえて、中国人にはあまりないという話を、信頼できる筋から聞いたことがある。仮にそれが事実であるなら、見張り意識のDNAが、現在でも日本人の意識の中に存続していることの例証と言えようか。

なお、引用文中の「マキャヴェリズム」というのは、ルネサンス期に『君主論』を書いたマキャヴェリに由来する言葉で、通常は、目的のためには手段を選ばない、目的は手段を正当化するという意味で使われている。

ここでもその意味と理解しておく。つまり、この国を管理統制するという目的のために、あらゆる局面に二重機構の牽制制度が整備されているという意味であろう。

三、ブルーノ・タウト『日本美の再発見』の所説

『日本美の再発見』^(注1)はドイツの世界的建築家ブルーノ・タウトが日本文化の美の真髄を解き明かした書である。ことに、桂離宮に対する絶賛ぶりが注目され、その後の日本建築に対する評価に大きな影響を与えた。

タウトは一九三一年、ベルリンのシャルロテンブルク工科大学の教授に就任したが、ナチスから親ソ連派と目されて職と地位を奪われた。ジャポニスム、アール・ヌーヴォーを通して日本に関心を抱いていた彼は、一九三三年(昭和八)五月に来日し、そのまま亡

命して一九三六年まで四年間、日本に滞在した。

彼は建築家としての鋭い直観と哲学的思考により、日本の芸術と文化を深く見つめた。数寄屋造りの中にモダニズム建築に通じる現代的性があることを評価し、伝統と現代という問題について日本人建築家に与えた影響は大きい。

本稿のテーマに関わることとしては、桂離宮と日光東照宮の表現様式がいかに異なるかということについて説いた点が注目される。このことについては、第一回目の論考ですでに取り上げたが、簡単に再述しておく。

まず、日光東照宮(日光廟)について次のように批判している。

かかる専制者芸術の極致は日光廟である。ここには伊勢神宮に見られる純粹な構造もなければ、最高度の明澄さもない。材料の清浄もなければ、釣合の美しさもない、——およそ建築を意味するものはひとつもないのである。そしてこの建築の欠如に代るところのものは、過度の装飾と浮華の美だけである。

一方、桂離宮については次のように絶賛している。

……桂離宮は、伊勢の外宮と共に、日本建築が生んだ世界的標準の作品と称してさしつかえない。日本の思想に含まれている純正高雅な要素は、奈良時代から一千年を降ったこの時に、その間に分化した種々な技法と精神の哲学的洗練と結合して、いま一度桂離宮に集注したのである。

さらに、世界的建築物との比較においても、桂離宮は群を抜いた

なんと奇妙なと思うかも知れないが、それは、「目付」^{オメツキ}、文字通りに訳すと「見通す目」だと説明される。平易な英語でいうと「スパイ」のことで、その人なしに通訳が自分の役目をはたすことは危険なのだ。その「目付」^{オメツキ}なるものは、かれが裏切りの行動をとらないことを立証する人と考えられているからである。

「オメツキ」とあるのは、江戸幕府の職名として用いられた「目付」のことである。

『日本史広辞典』（山川出版社、一九九七）によれば、目付は「老中や若年寄の耳目として、旗本・御家人の監察を任としたが、その他江戸城内の巡察、消防の監視、將軍の供奉、評定所出座、法令伝達、願書などの評議、勝手掛、日記掛、町方掛、幕末期には外国掛、海防掛など職掌は多岐にわたった」とある。

この職掌の中の「外国掛」がオールコックに関係するところであろう。それはあくまで公的な監察であって、秘密裏に行動するスパイとは異なるが、見張りをするという意味では、確かに共通性はあろう。いずれにしても、通訳にさえもそういう公的な見張り役が存在すること自体、西欧人のオールコックの目には異様なことだったのであろう。

現在の日本社会は、そこまで個人を尊重しない監察体制ではなくなっているものの、しかし、上司の意向を確認しないとほとんど判断不能という傾向は持続しているように見てよい。

たとえば、世間で語られているジョークに、次のようなものがある。

無人島に二人の男と二人の女が流れ着いたら、
イギリス人の場合、女をめぐつて男が決闘する。

フランス人の場合、女は片方と結婚し、片方を愛人にする。
ロシア人の場合、女は愛してないほうの男と結婚し、三人はそれを嘆いて暮らす。

日本人は、携帯電話で上司にどうしたらよいか伺いをたてる。

もちろんこれは笑い話であって、それがどの程度事実を反映しているかについては厳密な検証が必要である。とは言え、日本人が上司の意向を重視しがちであることは否定できない。

オールコックはまた、日本社会の二重構造を、次のように指摘している。

過去何代となくただ君臨しているにすぎない称号だけの君主と、ただ統治するだけで君臨しない帝国の代理者^{リプレゼンタント}というこの二重の機構は、たしかにひじょうに奇妙なものである。これがながいあいだ継続されてきた結果、世界の他のどこにもこれまでけつしてないような二重組織を生み、これが生活のほとんどあらゆるこまかい点にまでゆきわたって行なわれている。どの役職も二重になっている。各人がお互いに見張り役であり、見張り合っている。全行政機構が複数制であるばかりでなく、完全に是認されたマキャヴェリズムの原則にもとづいて、人を牽制し、また反対に牽制されるという制度のもっとも人念な体制が、当地ではこまかな点についても精密かつ完全に発達している。

「二重組織」というのは、基本的には前掲引用部分の「二元的原理」と同義であろう。ここでオールコックが指摘しているのは、言うまでもなく天皇制と幕藩体制の二重構造のことである。明治維新でそ

一の説話、つまり同じまな板の上に見られる四極現象の典型事例として説いたつもりである。

本稿では、以上の論考を踏まえつつ、少し視点を変えて、外国人が指摘した日本文化の双極性(二元性・二重構造・二面性)を取り上げることにより、「日本文化の四極性」についての考察を深めてみたい。

二、オールコック『大君の都』の所説

『大君の都』^(註1)は、幕末に来日したイギリス外交官が、その滞日記録を著述した大著である。多難な幕末期の政治・外交の実態が詳細かつ網羅的に記されている。また、日本人の生活や社会・文化についても驚くべき視野の広さで観察している。

通常、幕末外交史の貴重な資料として知られるが、私の見るところ、歴史資料にとどまらず文明批評の書としても高く評価できる。

「大君」とは徳川幕府の将軍のこと。当時、外国向けに幕府が用いた言葉である。

著者のオールコックは清国駐在領事等を務めた手腕を買われ、一八五九年、初代駐日総領事に任命された。江戸城で日英修好通商条約の批准書を交換し、特命全権公使に昇格した人物である。

その著『大君の都』には、日本社会の二元性について述べたくだりがある。そのまま引用してみる。

たしかに日本人は、なんでも二つずつというのを好むようだ。二元的原理が人間の組織のなかにはいり、全自然に浸透しているのをわれわれは知っているが、日本の特質のなかには、この

(二)

二元的なものが、どこよりもひとときわ念入りに進歩しているようだ。ある博識な医者が主張するように、われわれが外見上二つの目と耳をもっていると同じく、頭のなかには二つの完全な頭脳がはいっていて、そのおのおのが両者を合わせた機能のすべてを果たし、また独立したいくつもの思考さえ同時に営むことができるということが真実だとすれば、日本人の頭脳の二重性はあらゆる種類の複合体を生み、政治的・社会的・知的な全生活のなかにゆきわたり、これらをいわば二重化する方法を生み出してきたと見なすことができるであろう。

「ある博識な医者の」「主張」とあるのは、著者自身の注によると「ウィガン博士の説」と説明されている。しかし、それについての詳細は不詳。ウィガンなる人物については各種辞書類やインターネット検索でも手がかりが得られなかった。

「頭のなかには二つの完全な頭脳」が入っているというのは、おそらく右脳と左脳のことであろう。それを日本人の二元的原理の原因と見るのは、軍医でもあったオールコックの、いかにも彼らしい分析といえる。その説の当否は疑わしいとしても、面白い着眼である。

そして、日本人の二元的原理の実例として、通訳の行動をあげている。

日本では、ただひとりの代表だけと交渉するということは不可能だ。元首から郵便の集配人にいたるまで、日本人はすべて対になって行動する。たとえば、通訳を呼んださいに、かれがなかなかこないでその理由をたずねてみると、「かれは影なしにはこれられない」というはっきりした答えをえる。「影」とは

「日本文化の四極性」試論(三)

林 和利

一、はじめに

私は「日本文化の四極性」というテーマでこれまで二回、論文を発表している。

一回目は『名古屋女子大学紀要』第五十八号(人文・社会編)(平成二十四年三月)所収の「『日本文化の四極性』試論」であり、二回目は『民俗と風俗』第二十三号(平成二十四年九月)所収の「『日本文化の四極性』試論」である。

今回はそれに続く三回目ということになる。

一回目は、「中世と近世の双極」「縄文と弥生の双極」「東日本(関東)と西日本(関西)の双極」「四極の共存」「四極の融合」について論じた。要するに、「中世と近世の双極」の具体的事例を示すとともに、「縄文と弥生の双極」についても具体的事例を示し、前者を横軸に取り、後者を縦軸に取って組み合わせれば四極になるという理論的試論である。

二回目は、四極の共存と融合について再度まとめたいうえで、四極性の事例を説話の展開に求め、「金太郎説話」に見る四極性を論じた。その結論は次のとおり。

各種の金太郎(および金平)説話を二種の双極に分けて考え、総合して四極としたのである。

まず中世と近世の双極。

中世すなわち室町時代の作品は、能「大江山」「羅生門」と御伽草子「洒吞童子」。これらの金太郎(金時)像はとりわけて武勇の姿として描かれているわけではない。四天王の末席につらなるに過ぎない矮小化された存在である。

一方、近世すなわち江戸時代の作品は近松門左衛門の「姫山姥」。そこに描かれた金太郎は幼少にして怪力、豪快なイメージである。両者は双極的な姿であると認められる。

もう一つの双極は縄文の名残とおぼしき関東(江戸)と、弥生の名残とおぼしき関西(上方)である。

江戸の代表は金平浄瑠璃。金太郎の息子、金平を登場させ、そこに拡大して描かれた豪快にして躍動的な金太郎像が顕著に見られる。

一方、上方すなわち都における金時(金太郎)の行動を描いた『今昔物語集』は脆弱にして恥ずかしがり屋。豪胆さのかけらもない。これも両極端な二つのキャラクターであり、双極と認められる。

これら二つの双極を総合すると四極になりうる。すなわち、金太郎説話には日本文化の四極性が顕著な形で現れていると説いた。同